

「干物箱」

—初稿—

2023/1/13

雨森 れに

〈人物表〉

金本 明宏 (49)	藤田組幹部
高橋 圭介 (37)	金本の補佐
加藤 太一 (53)	服役中の受刑者
組長 (59)	藤田組組長
組員 (40)	金本に憧れる平組員
刑務官A	面会時に監視している
刑務官B	面会時に記録を取っている
落語家	刑務所に慰問

〈ログライイン〉

①高橋を庇って受刑中の金本が、落語慰問の演目を聞いて高橋の気持ちを考える。

②金本の代わりにを務める高橋が、後悔のあまりに本当のことを暴露しようとして金本に怒られる。

作者の狙い…立場に応じての責任の重さ・落語に興味を持ってもらう

〈落語・干物箱〉

放蕩息子に怒った大旦那が、息子を軟禁する。

遊びたい息子は風呂を理由に半刻の外出を手に入れる。が、風呂にしかいけないので半刻後に声真似のうまい与太郎に身代わりを頼む。

干物のおつかいを頼まれた時も、半刻後に与太郎を置いた。

しかし干物を取りに来た大旦那が部屋の外に来る。

「ダメになる前に干物をおくれ」「干物は干物箱に入れた」「なんだそれは。

そんなものあるか。なんかおかしいなお前」「おかしいのは風邪をひいたからだ」とやり取りする。心配した大旦那が静止を聞かずに薬を持って入ってくる。

バれていることも知らずに息子が帰ってきて、廊下から与太郎に声をかける。すると「この大バカ者！お前は勘当だ！」と大旦那の怒鳴り声が聞こえた。

「さすがは与太。親父の声もそっくりだ」と息子は感心する。

1. 歌舞伎町・道路（夜）

パトカーの光。野次馬が遠巻きに見ている。金本明宏（49）がパトカーに誘導される。手錠された腕は上着で隠されている。
アスファルトの上には血だまりができている。

2. 刑務所・外観（昼）

門の前にスーツ姿の高橋圭介（37）が立つ。

3. 刑務所・面会室（昼）

金本と高橋がアクリル板越しに向かい合っている。
部屋の間には刑務官Aが立ち、刑務官Bが書記をしている。

金本、申し訳なさそうに笑いながら、

金本 「あの時は頭に血が昇っちゃってさあ」

高橋 「だからって人を殴っていいわけじゃないですよ
ね」

金本 「それはあつちが」

高橋 「最初に手を出すほうが悪いんです。あなたがいないとどれだけ大変かわかりますか」

高橋、机の下で拳を握る。

金本はおどけたように、

金本 「しかも殺しちゃって。その上、余罪ごろごろ」

高橋 「金本さん」

金本 「大丈夫、大丈夫。ゼーンぶ償うよ」

高橋が刑務官Bが書きつけているのをちらりと見る。

高橋 「（小声で）やっぱり自分は」

金本 「いいって」

金本、頭を下げる。

金本 「けーちゃんばっかりに任せてごめんな」

刑務官A 「そろそろ時間です」

金本 「じゃ、また来てよ」

高橋 「(ため息) 忙しくなければ」

4 刑務所・門(昼)

刑務官に見送られ、高橋が歩いていく。

5 刑務所・金本自室(昼)

老眼鏡をかけて本を読む金本。

6 藤田組・事務所(夕)

一般的な貸事務所。社長デスクセット、大き目のソファードeskがいくつか置いてある。壁紙はヤニに染まっている。

デスクで書類仕事をする高橋に組員(40)が近づく。

組員 「次の幹部になるために金本さん消しただろ」

高橋 「俺が金本さんに任されたんで」

組員 「んなわけあるか」

組員、高橋の胸倉を掴む。

両者睨み合う。

高橋 「じゃあやってみたらいいんじゃないですか。俺よりうまくできるようには見えないうすけどね」

組員、事務所に入ってくる。

組員 「おい、なんだ。こんなところで」

組員 「あ、組長、すみません。でも」

組員は高橋から手を放す。

高橋、無言。ネクタイを整える。

組員(59)、社長椅子に座る。

組員 「高橋、例の件のことだけだよ」

高橋 「はい。問題ないです」

組員、顔を歪め、事務所を出ていく。

7 刑務所・作業室(朝)

長い作業台に向かい合わせで座り、木工製品を組み立てている受刑者たち。金本も淡々と木工製品を組み立てている。金本の隣に座る加藤太一（53）が話しかける。

加藤 「今日は落語家さんくるんだってさ」

金本 「知ってるよ」

8 刑務所・大ホール（昼）

慰問会。演目は干物箱。並べられたパイプ椅子の最後尾列端に金本と加藤が座っている。

たびたび会場が沸く中、金本は目を閉じ、腕を組んで聞き入っている様子。

落語家 「さすがは与太。親父の声もそっくりだ」

オチの一言で落語家が礼をする。周囲は大笑い。

金本の口元も緩む。

9 刑務所・多目的室（夕）

ざわついた雰囲気。受刑者たちがおのおの自由に過ごしている。本棚の前のテーブルに陣取る金本と加藤。

加藤 「なあ、金本さん。さっきの。落語ってのは面白いね」

金本 「感動したなあ」

加藤 「（驚いたように）へえ。どんなところが？」

金本 「んだよ。与太郎が身代わりやってやるどころだよ」

加藤 「てっきり寝てるのかと思ったからさ。ていうか、与太郎ってより息子や大旦那のやり取りが面白かっただろ」

金本、笑う。

金本 「だからさ。感動したんだよ。与太郎の健気さに」

加藤 「あれはただのバカだろ。やっぱどこどこ寝」

「てたんだな」

金本 「ちゃんと聞いてたって」

加藤 「タイトル覚えてるか？」

金本 「干物箱」

加藤 「お。落語家さんも洒落てるよな。干物入れとく箱。刑務所みたいなものだ」

金本 「お前こそ話聞いてたか？ そんなものはないんだって話だろ」

加藤 「もしかして、それ本に書いてあった？」

10
料亭・個室（夜）

坪庭の見える座敷。庭の中央にはししおどし。

高橋 「金本さんはどうやっていたんですかね」

組長 「面倒見がよかったな。唯一のいいところだ」

高橋 「自分にはその人望がありません」

組長 「それは追々だな。俺は少しでもクリーンに見える奴を傍に置いてみてえんだ。あれだ。ご時世的に」

高橋 「ご時世的にですか」

組長 「（笑いながら）そうそう。金本は常々そう言ってたよ。新しい時代には高橋みたいな方がいいだろうって」

高橋 「自分だって古い人間です。金本さんが危ないと思ったら、言葉より刃物が出ました」

組長 「それは言っちゃダメだろ」

高橋 「いや。言わせてください。金本さんの為にやっただんです。なのに、こんなやつてないですよ」

組長 「アイツはな、疲れてたんだよ。いろーんなことこき」

組長、酒を煽る。

ししおどしが鳴る。

組長 「ほら。飲め」

高橋、注がれた酒を一气飲みする。

11 刑務所・面会室（昼）

前回と同じ部屋。刑務官A、刑務官Bが控えている。

金本 「1ヶ月も経つと人間ってこんなに見た目変わるか？」

高橋 「3キロ痩せました」

金本 「時間できたなら、こんなところ来ないで飯食えよ」

高橋 「誰のせいで大変だと思うんですか」

金本、高橋をじっと見つめる。

高橋 「金本さんみたいにできません。自分が代わります」

高橋、刑務官Bを見る。

金本 「おい。けーちゃん。それは駄目だ」

刑務官B、顔をあげる。

高橋 「本当は金本さんは、」

金本 「よせって」

高橋 「殺していな」

金本、高橋の最後の言葉を遮って大声で、

金本 「いいから黙れって」

金本、椅子から立ちあがり、隔てるアクリル板を殴る。

刑務官A Bが駆け寄り、金本を羽交い締めにする。

刑務官A 「やめなさい。金本、禁止事項だ」

金本、暴れる。

刑務官B 「おい。金本。やめなさい。懲罰房行きだぞ」

金本 「おめえのツラなんか二度と見たくねえ」

刑務官A、暴れる高橋を部屋の端まで引きずる。

刑務官B 「面会は終わりです。ご退出ください」

高橋、立ち上がり退出する。

12 刑務所・多目的室（夕）

本棚前のテーブル。加藤が座ってテレビを見ている。

そこに金本が現れる。

加藤 「3時間ってどこか？」

金本 「アクリル板殴っただけだし」

加藤 「普段真面目だからかねえ」

金本 「まあ、たまには懲罰房も悪くなかったな。そう
だ。この前の落語、本で読むか？」

加藤 「落語を本で読むってどうなの」

「うまくいかねえな。でもやっぱり与太が健気だ
なって思う」

加藤 「金本さん、与太、すきだねえ」

金本 「おう」